

学会ニュース

目次

・ 2019年度学会費納入のお願い	1
・ 第41回大会および第42回大会について	1
・ 2019年国際18世紀学会エディンバラ大会 セッション報告	2
・ 2019年国際執行委員会報告	6
・ 代表幹事退任に当たって (小田部 胤久)	7
・ 代表幹事就任に当たって (逸見 龍生)	8
・ 事務局より	9

2019年度学会費納入のお願い

代表幹事 逸見 龍生

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙（未納分が3年を超える方は印字無し）を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。なお、口座番号は以下の通りです。

〈郵便口座振替で振り込む場合〉

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会

口座を新事務局に移管するにあたり、加入者名を「日本18世紀学会事務局」から会則に記載された「日本18世紀学会」に変更するよう、ゆうちょ銀行に要請されました。記号番号に変化はありません。

〈銀行等から振り込みする場合〉

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

行き違いにより、会費を納入したにもかかわらず振替用紙が届いた方は、お手数ですが、新事務局までご連絡ください。

第41回大会および第42回大会について

今年度の第41回大会は、2019年6月8日（土）、9日（日）の両日、中部大学で開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の玉田敦子会員をはじめ、中部大学の方々に篤くお礼申し上げます。

共通論題Ⅰ「思想史とジェンダー」共通論題Ⅱ「《近代》の形成における古代表象の諸相」の発表者の方々、コンサートの出演者の方々にもお礼申し上げます。

来年度の第42回大会は、2020年6月27日（土）、28日（日）に明治大学で開かれる予定です。開催校責任者は奥香織会員・辻昌宏会員です。詳細は追ってお知らせします。

2019年国際18世紀学会エディンバラ大会 セッション報告

国際18世紀学会第15回大会は、2019年7月14日(日)から19日(金)にかけて、英国のエディンバラ大学で開催されました。

The Enlightenment Politics of Time and History 1-3

上野 大樹

オーガナイザー：上野 大樹（一橋大学）、Iain McDaniel (University of Sussex)

発表者：Maria Pia Paganelli (Trinity University)、佐藤 空（東洋大学）、上野 大樹（一橋大学）

上村 剛（東京大学大学院）、小谷 英生（群馬大学）、関口 佐紀（早稲田大学大学院）

Rémy Duthille (Université Bordeaux Montaigne)、Iain McDaniel (University of Sussex)

ISECS国際啓蒙会議エディンバラ大会は、会員参加者1500人以上、パネル数500弱、しかも1セッションにつき30以上のパネルが同時並行で進められるという空前の規模で開催された。大会共通テーマは「啓蒙の/とアイデンティティ」であり、多くのセッションは何らかの形でアイデンティティにかかわる題目を冠して行われたが、各人の報告論題の選択は啓蒙期（長い18世紀）にかかわるかぎり自由であり、報告後の自由討論の時間に議論の大まかな方向性をつけるといった程度のごく緩やかな縛りとして設けられたものである。われわれのパネルとしては、組織委員会から提示された趣旨文（大会HPで閲覧可）をかなり意識したうえで、これまで共同研究のなかで主題にしてきた歴史叙述や時間意識の変容といった問題群のうちに啓蒙期のアイデンティティ形成の諸相を読みとるということを通課題に据えて「啓蒙期における時間と歴史の政治学」という題目を設定した。

前回ロッテルダム大会の際には日本18世紀学会の諸先輩方よりこれまで国際啓蒙会議に参加してきた経験を惜しみなく共有していただき、今回のパネル組織にあたっては、(1)できるかぎり多国籍のチームを編成すること、(2)大学院生にも加わってもらうこと、(3)一回限りで終わらない息の長いコラボレーションの足掛かりとして海外の研究者と親交を深めること、といった点を意識して準備を進めてきた。今回たいへん幸運なことに、近年の思想史研究の主たる方法であるケンブリッジ・メソッドを継承した成果を多数発表している、サセックス学派の新進気鋭の研究者イアン・マクダニエルさんに共同企画者を引き受けてもらうことができ、また国際アダム・スミス学会(IASS)会長のマリア・パガネッリさん、ISECSと所縁の深いVoltaire Foundationより単著も出されているレミ・デュティユさんに報告者として加わってもらうことができた。三名とも来日が機縁となって我々の研究グループに関心をもってもらうことができたという点を考え合わせると、いままでの18世紀学会員および元会員の国際的な研究活動の長期にわたる蓄積のうえに今回のパネルも成立しているのだということを感じずにはいられない。個別に名前を挙げればきりが無いが、特に東京大学のPoETS等を拠点に海外研究者の招聘を精力的に進められている野原慎司会員にはここで謝意を表したい。今後、今回のパネルでの議論やエディンバラでの様々な出会いを起点として、とりわけ韓国・中国・台湾など東アジアの諸都市を拠点としている近代ヨーロッパ思想史・文化史研究者とのネットワークングを進めていく計画である。

エディンバラ大会では、本パネル以外にも数多くの政治思想史・社会思想史関連のパネル・セッションや本会議講演が開かれていたが、率直に言えばあまりに大会の規模が大きくなりすぎているため、これらの分野に特化した場合でもその全体像を把握することはきわめて困難である。多分に主観的な雑感の域を出るものではないが、ごく概括的に述べるならば第一に、大文字の政治(思想)史にたいする批判以降ミクロな社会史や文化史・生活史に重点が移った結果として啓蒙研究が細分化・蛸壺化し、かえって領域横断性が失われていた面があったのに対して、特に今回のキーノート・スピーチ(plenary speech)では、出版文化・メディア・表象・公共圏・文芸といった種々のトピックと啓蒙思想

史研究とを架橋して「長い18世紀」のより大きな像に総合的なしかたで迫ろうとする研究が目についたように思われる。第二に、啓蒙概念の(再)定義をめぐる論争もひとつの起点となって英米系の思想史研究者が大陸ヨーロッパの複数の啓蒙の動向に関心を深めると同時に、大陸の若手・中堅の研究者がケンブリッジ学派の研究蓄積と手法をとり入れるようになった結果、ヨーロッパ啓蒙の全体像を視野におさめるような比較史的コミュニケーションの基盤も徐々に形成されつつあるようにみえる。第三に、開催都市がエディンバラであったことにくわえ啓蒙におけるスコットランドの位置づけが重視される動向も相まって、スコットランド啓蒙を主題にしたりそれとの関連に論究したりするような報告が相対的に多かったように思われる。同時にアイデンティティが共通テーマになったこともあり、イングランドの島国性と対照的なスコットランドの汎ヨーロッパ的な紐帯や国民的自己意識、また今日のブレグジットの危機に象徴される大陸・ブリテン関係の緊迫と再定義といった現代的問題にもつながっていく歴史意識の地層が議論となる場面も見受けられた。

しかし、最後につけくわえるなら、上述のような学会規模が問題を生みだしている側面もあることは指摘しておく必要がある。学术交流面でいえば、あまりに参加人数が多いがゆえに、かえって蝸壺化して広がりのあるコミュニケーションの機会が生じにくいという問題があるのではないだろうか。対策としては、大会をひとつの都市的社交の空間としてとらえ、そこで得られた繋がりを、各人が意識的により小規模で濃密なワークショップや研究会の開催へと展開していくという方法がひとつ考えられるだろう。

エディンバラ大会での日韓共同セッションについて

長尾 伸一

本年の国際大会は例年にも増して多くの参加者があり、記念講演、セッション、パネルなど、計500程度の催しものが開催された。アジア人の報告も多く、いくつかのセッションでアジアの話題が取り上げられている。

そのうち本学会と韓国学会が共同して企画したのは、7月18日に開催された「グローバル啓蒙におけるアジアのアイデンティティ」と題された以下の3つのセッションである。回数を重ねてきた日韓共同セッションだが、今回の特徴は日本学会の要請に基づき、中国からの参加が見られたことだった。中国からは中国人民大学の清史研究所の研究者を中心とする北京グループの歴史家が、日本学会主催の共同セッションに参加した。

また共同セッションに先立つ15日2時には、国際学会と連携している上海の文学研究者金雯さんを中心とする上海グループのセッションが開催され、隠岐会員が司会を務めた。女性史的視点からの18世紀英文学と中国文学比較、シャフツベリの「ユーモア」論など、主に英文学、イギリス思想史の若手・中堅研究者による活気ある報告があり、活発な討論が行われた。報告者とタイトルは以下の通り。

39. China and the English Enlightenment: Cultural Traffic and Beyond

Chair/Président.e: Sayaka Oki (Nagoya University)

Wen Jin (East China Normal University) Emotion and Female Authority: A Comparison of Eighteenth-Century English and Chinese Fiction

Sijie Wang (Justus Liebig University Giessen) Exile from Romance and Reality: Self-Annihilating Mobility in The Female Quixote

Yun Fan (Zhejiang University) Laughter in Public Life: Shaftesbury's View of Humour and Its Destiny in Modern China

Ruoen Fan (Sun Yat-sen University) The Picturesque and 'Classical Elegance' (guya)

共同セッションについては、まず18日午前中10時から、韓国学会会長のミンさんが司会し、近世朝鮮王国の宗教、東アジアにおける筆談文化とタバコの文化および司馬江漢について、それぞれのテー

マに関する韓国学会の代表的な専門家による報告と討論が行われた。報告者とタイトルは以下の通り。

290. Asian Identities in the Global Enlightenment 1

Chair/Président.e: Eun Kyung Min (Seoul National University)

Byungul Jung (Seoul National University) Dying for God: The Encounter and Conflict between Confucianism and Catholicism in Eighteenth-Century Korea

Chin-Sung Chang (Seoul National University) ‘The Western Painter from the Eastern Capital’: Shiba Kōkan (1747–1818) and His Vision of Europe

Min Jung (Hanyang University) A Sociology of Written Communication: ‘Brush Talks’ (p’iltam) among East Asian Intellectuals in the Eighteenth Century

Daehoe Ahn (Sungkyunkwan University) The Story of Tobacco: Cultural Discourse on Smoking in Eighteenth-Century East Asia

2時半からは長尾が司会し、北京グループの歴史家による、清朝の辺境防衛都市建設、清朝王女の埋葬、明清時代における孔子家と国家統治、18世紀北京の法システムと、新鮮な切り口で清朝を多面的に分析した。報告者とタイトルは以下の通り。

322. Asian Identities in the Global Enlightenment 2

Chair/Président.e: Shinichi Nagao (Nagoya University) and Atsuko Tamada (Chubu University)

Niu Guanjie (Renmin University of China) The Construction of Dual Frontiers of Qing Empire: Focused on the Chasing Deserters Movement in the Yongzheng Period

Mao Liping (Qing Institute of Renmin University of China) Burying Qing Princesses—What Changed and Why?

Wu Peilin (Qufu Normal University of China) Governance, Recommendation and Restriction: Election and Abolition of Hereditary County Magistrates in Qufu, Shandong in the Ming and Qing Dynasties

Hu Xiangyu (Qing Institute of Renmin University of China) Judicial Unity in a Segregated City—The ‘Web’ Structure of the Judicial System in Eighteenth-century Beijing

4時45分からは玉田会員の司会で、日本学会の小関会員、坂本会員、西本会員が、それぞれ近世西洋思想・文学を念頭においた竹取物語の検討、18世紀フランスでの日本情報の分析、選択理論に関する18世紀と現代の比較と、日本学会らしい比較論的な研究を報告し、そののち総括討論が行われた。報告者とタイトルは以下の通り。

355. Asian Identities in the Global Enlightenment 3

Chair/Président.e: Shinichi Nagao (Nagoya University) and Atsuko Tamada (Chubu University)

Takeshi Koseki (Hitotsubashi University) Kämpfer et Charlevoix : deux regards sur le Japon

Takashi Sakamoto (Rikkyo University) The Tale of the Bamboo Cutter and the Orphic-Pythagorean

Kazumi Nishimoto (Chubu University) A link between the Eighteenth and Twentieth Centuries—Rational Choice Theory, K. J. Arrow, A. Smith, and Japan

セッションの後の夕食会では、次期韓国学会会長を含め、日本、中国、韓国の主要なメンバーが集い、親睦を深めた。その際に会長ミンさん、長尾、清史研究所事務局の毛さん、上海の金さんの4人で、今後の見通しを話し合った。そこではミンさんから、毎年国際研究集会を開いて、4年先に向けて交流と準備をしてはどうかという提案があり、その方向を考えることになった。中韓の研究者は外国旅費が支給される点で、日本とは事情が異なる。とはいえこの間の日韓交流を支えた高橋博己さんを代表者とする4回の科研は、代表者を交代して続けられているので、小規模なものなら日本以外の場所でも可能である。この科研は金城代表の金城学院の張さんの考えで、2年後の最終年度に中国で開催するという方向がすでにあり、それに向けて来年は、研究集会を日本か韓国で開催することとなった。

さらに金さんからは、インターネットでの情報、レビューの共有などができないかという提案があ

った。また電子ジャーナルの可能性等についても話し合った。この点は執筆者の確保上すぐにはできないが、国際研究集会を積み増さねて考えていくというのがミンさんの考えだった。また金さんから、各国語の重要な論文を訳して載せていってはどうかという提案もあった。また後日筆者が別件でソウルに行った際、ミンさんから、パルグレーブの編集者にシリーズ出版を企画している編集者がおり、すでに国際学会の報告を踏まえた「アジアでのロマン主義」といった本が出版予定となっているので、「アジアでのスコットランド啓蒙」など、同様ないい企画を考えて提案すれば公刊できるのではないかというアイデアをうかがった。

共同セッションはすでに数回開催し、今回は金さんの上海パネルも含め、計4つが開催でき、開催実績という点では十分な積み重ねとなった。さらに今回は日韓に加え、中国からの参加も得て、事実上三か国の共同セッションというかたちをとることができた。次回からは東洋そのものに関心を持つ人々が少ないISECSでアジアからの18世紀の視点をアピールするように、内容の厳選、高度化をはかっていく段階になったと思われる。

これについては以下の点が検討課題となる。ミンさんのような実力者も含め、中韓のヨーロッパ研究者は最初から地域間交流・比較の観点から自分たちの独自性を出そうとしていて、この点が日本の多くの方々と違う。またそれだけに、国際学会でのアピール力が強い。今後内容の深いセッションを構想する場合に日本の学会からどのようにこれに対応するのか、考える必要がある。

なお今回は長年にわたって日韓共同セッションを支えられてきた高橋博己会員が、事情で欠席された。韓国、中国それぞれ割合は違うが、それなりに西洋と東洋の専門家が参加しているのに対して、日本学会には日本、アジア研究者が非常に少ない。そのため十数年にわたる歴史を持つ共同セッションは、大家の高橋さんお一人にすぎる形で進められてきた。今後その達成をもとに、日本学会のいっそうの国際化とアジア地域連携を進めるために、この点の改善が急務となってきている。

今回のセッションの組織化と並行して、国際学会と日本学会は中国学会の再建に向けた働きかけを行ってきた。三か国セッションの実現に向けて多大な努力をされた人民大学の牛さん毛さんご夫妻と上海グループを率いる金さんは、これについても尽力されてきた。今回エディンバラで北京と上海の二つが合流し、将来の中国学会再建に向けての動きが本格的に始まった。中国の方々は、それを日韓と連携して進めていきたいと考えている。会員の皆さんのご協力をお願いしたい。

演劇と18世紀のエピステーメー

阿尾 安泰

オルガナイザー：阿尾 安泰（九州大学）

報告者：奥 香織（明治大学）、馬場 朗（東京女子大学）、阿尾 安泰（九州大学）

大会4日目7月18日の8時から開催された。18世紀においては、演劇の拡大が語られる。ただその拡大は、劇場数、観客数の増加といったこのジャンルの量的な範疇にとどまるものではなく、演劇が開く地平が質的にも新たな段階に達していくことを意味している。創作行為を支える思想的な基盤が問われるとともに、そうした活動と連動する政治的、社会的な状況が考察の対象となることで、演劇は領域横断的にこの時代の様々な分野に深い影響を及ぼして行く。演劇に関する問題は文学的な範疇を超えて、18世紀という時代の認識の枠組みの構成に関わるものとなる。18世紀の独自性を、演劇というプリズムを通して、浮かび上がらせることをこのセッションでは目指した。

奥氏は、俳優の演技に関するディドロとタルマの考えに光を当て、感受性の問題を検討した。ディドロは『俳優に関する逆説』の中で*nulle sensibilité*という表現を用い、俳優は役柄に同化するのではなく、冷静さと距離をもって演じるべきであると主張した。一方、俳優タルマは、「ルカンと劇芸術に関する考察」（『ルカン回想録』の序文、1825）の中で、ディドロの考えを否定的に引用しつつ、観

客に訴える演技には「過度の感受性」が必要であるとした。両者の見解に相違はあるものの、ともに舞台創造における俳優の感受性に注目し、それが、舞台効果や観客の受容と切り離せない、舞台実践の要であることを示した。

馬場氏は、特にルソーの『ダランベール氏への手紙』が受け継ぐ演劇性批判の文脈を踏まえて、『エミール』におけるストア主義・反ストア主義の検証を試みた。デカルトそしてデュボス等による古典主義的な「虚構の快」がストア主義と実は連続することに留意しつつ、『エミール』の著者がこの古代以来の「強い主体」の思想から無視できない影響を受ける中で同時代の社会を謂わば演劇状態として批判したこと、しかし「女性性」と不可分なその趣味論を軸にストア的な「強い主体」には還元できぬ新たな美学を確立しようとした可能性を明らかにした。

阿尾は、『ダランベール氏への手紙』が、演劇問題を論じる際に、演劇を取り巻く外在的な状況をも考慮すべきであるという、従来は見られなかった視点を導入したことに注目した。こうした立場を取ることで、今度は演劇が、影響を及ぼしてくる現実に対して、それを把握する視座を提供することが可能となる。実際、1757年に発生したダミヤンによるルイ15世暗殺未遂事件を人々は、陰謀劇という図式で解釈を試み、その全体像を把握しようとした。この演劇的な枠組みをルソーの自伝的な作品、特に『対話』に適用することで、新たな分析の可能性を探ろうとした。

発表後の質疑では、指摘されたストア派からの影響がデイドロにもみられるのではないか、という興味深い意見も提起された。また、感受性の問題については、舞台における「崇高」の問題と関連させることで、より広い視点での考察の可能性も示唆された。そして、処刑などにおける儀式性の問題なども指摘された。こうした応答を経て、今後の幅広い研究の展開を予感させながら、セッションは終わった。

2019年国際執行委員会報告

隠岐 さや香

日本18世紀学会（JSECS）は国際18世紀学会（ISECS）の加盟学会の一つである。本稿では国際18世紀学会の執行委員会（EC）の動向を報告する。

国際18世紀学会は拡大基調である。本年はインド、チュニジア、南東欧18世紀学会の加盟が承認された。財務状況はここ数年支出超が続いている。

本年は国際18世紀学会にとって節目の年となった。後述する事情で執行委員会の体制が大きく変化するからである。そのため7月17日の総会では学会の規約の修正が検討された。

その事情というのは、1967年以来、40年にわたり同学会の財務管理をしていたオックスフォード大学ヴォルテール財団が全集刊行の終了に伴い業務を縮小すること、そして、その財務管理を引き継ぐ法人の設立が必要となったことである。そのために、フランスの1901年アソシエーション法に基づき、ソルボンヌ大学に18世紀研究アソシエーションが設立される運びとなった（補足：同団体の設立提案は8月9日にフランスで法的に受理された）。これは、国際学会の運営管理を保証する国際法が今現在に至るまで存在しないため、やむを得ない措置でもある。なお、ウェブサイト運営や名簿管理等、他の事務局機能は既にカナダのケベック大学に移転しているので、新法人に引き継がれるのは財務管理のみである。

国際18世紀学会執行委員会の選挙結果も発表され、新会長にPenelope Corfield氏が選出された。日本からの立候補者2名（王寺会員、隠岐会員）は落選してしましたが、隠岐会員は日本18世紀学会の派遣委員として執行委員会メンバーには引き続き留まる（補足：国際学会執行委員会は、各国学会の派遣委員と選挙により選出された委員、ならびに会長が任命する補充委員の三種類から構成される。9月に入って、日本からは新たに玉田委員が補充委員として推薦された）。今回は電子投票方式が導入

されたが、周知が徹底していないためか、有効票が485票と少なかった。

エジンバラの国際大会は1600名以上の参加登録があり、人文系の国際学会としては最大級との報告もあった。次回の大会は2023年7月9日～14日にイタリアのローマ（ローマ大学）で開催される予定である。テーマは“Antiquity and the shaping of the future in the age of Enlightenment / L'antiquité et la construction du futur à l'âge des Lumières”とのことである。関連情報は順次イタリア18世紀学会のウェブサイトに公開されるので、関心のある方は随時参照されたい（<http://www.sissd.it/>）。

来年度の若手研究者セミナーについても発表があった。2020年にLausanne（スイス）、2021年にAnn Arbor（アメリカ）、2022年にEggenberg（オーストリア）での開催が予定されている。

代表幹事退任に当たって

小田部 胤久

2017年6月から本年6月までの2年間、長尾伸一代表幹事の後を継いで代表幹事を務めさせていただきました。退任に当たり恒例に従いご挨拶申し上げます。

本年は4年に一度の国際大会の開かれる年でした。エディンバラという都市にとっても惹かれはしたのですが、その翌週にベオグラードで開かれる会議に参加せざるをえなかったため、エディンバラ大会への参加は断念いたしました。したがって、国際18世紀学会に対する私の感想は決して最新の状況に基づくものではありませんが、長年折に触れて感じてきたことを記すことにいたします。

国際18世紀学会の執行機関である Executive Committee は、かつて「国際18世紀学会執行委員会報告」（学会ニュース第74号、2013年12月）において触れましたように、基本的に西洋中心的です。例えば、執行委員として選出されるメンバーに非西洋圏の人がほとんどいない、あるいは非西洋圏の National Society から執行委員会に参加する派遣委員がほとんどいない、といったことにもそのことは如実に現れています。私の知るそのほかの国際学会と比べても、この西洋中心性は国際18世紀学会の際立った特質です。一体なぜ国際18世紀学会はかくも西洋中心的なのでしょう。

その大きな理由は、国際18世紀学会を構成する主要な各国（ないし各地域）学会の特質にあるように思われます。国（ないし地域）に応じて学会の規模はさまざまですが、例えばフランス18世紀学会であればそのほとんどの会員は18世紀フランスの研究者ですし、英国18世紀学会であればそのほとんどの会員は18世紀英国の研究者です。仮に18世紀の東アジアに関する研究を行っているフランス人／英国人がいたとしても、フランス／英国18世紀学会に入る利点はあまりないでしょう。もちろん、比較研究を主たる領域としている会員も一定数おり、それがこの学会の魅力となしはしていますが、その場合でも、比較の一方は自国にあることが多いと思われる。そして、国際18世紀学会を構成する主要な各国学会は、そのほとんどが西洋に属していますので、研究は自ずと西洋中心的となります。

これに対して、日本18世紀学会はといえば、そのほとんどが西洋の18世紀にかかわる研究者です。主としてイギリス経済思想史関係の研究者と、フランス啓蒙主義の研究者が設立にかかわった、という日本18世紀学会の歴史的経緯にもよるのでしょうが、自国の18世紀の研究者が少数派であるのは世界的に見ても稀であると思われる。韓国18世紀学会には、韓国の研究者と西洋の研究者が交互に会長を務める、という慣例がありますので、日本18世紀学会と比べると、自国の研究者がはるかに多いようです。中華人民共和国には今のところ18世紀学会は存在しませんが、仮に近い将来設立される場合には、中国人民大学（北京）の清朝研究者が中心を担うと予想されますので、自国の18世紀を研究するという点で、中国学会は西洋の主たる学会とその傾向をともにすることでしょう。

これに対して、日本18世紀学会に所属する会員の研究領域は多岐にわたりますから、日本18世紀学会それ自体が国際学会であるかの観を呈しています。日本18世紀学会の会員のほとんどが西洋の研究者であるといっても、日本18世紀学会はただ西洋に追従してきたわけではありません。毎年の年次大会の際の「共通論題」では、発表者のうち1名は必ず日本ないし東アジア関係者とする、という了解

があります。また、日本18世紀学会は長年にわたって韓国18世紀学会と交流を続けてきました。第31回大会（2009年、多摩美術大学）の総会において韓国文学を専門とされる鄭珉・韓国18世紀学会会長（当時）が挨拶をされたことも記憶に新しい出来事です。韓国との交流は必ずしも東アジアを主題とするものに限定されず、例えば第28回大会（2006年、広島大学）では、金定姫・韓国18世紀学会会長（当時）が18世紀イギリスのジェントルマンについて特別講演をされたこともありますし、また、国際18世紀学会において韓国18世紀学会と日本18世紀学会が共通のセッションを組むという試みもすでに定着しています。こうしたことを踏まえ、日本18世紀学会の特殊事情はかえって、独自の——つまり、西洋化でも欧米化でもなく、また単なる平準化でもない——国際化のための機縁ともなりうるように思えます。

先にも触れましたように、国際18世紀学会執行委員会はいまだに西洋中心のままで、そのために東アジアからの参加者にはどこか居心地の悪いものです。長年その執行委員を務められた日本のある会員が「名誉白人を演じさせられた」ことに不満を漏らされたのも、故なきことではありません。しかし、今後アジア諸国、あるいは南アメリカ諸国からより多くの学会が国際18世紀学会に参加するならば、事情は確実に変わるはずで、西洋化でも欧米化でもなく、また単なる平準化でもないような国際化、それは——私たちの先達が明らかにしてきましたように——たしかに18世紀に存在していたものです。私たち18世紀研究者はこうした国際化を再び手にすることができるのではないのでしょうか。そして、その過程において日本18世紀学会の役割は決して小さくはないと私は確信しています。

代表幹事就任に当たって

逸見 龍生

小田部胤久前代表幹事を中心とした常任幹事会の任期満了にともなう新幹事会の発足を受け、日本18世紀学会新代表幹事に就任しました。

本学会は、18世紀という時代をめぐり異なる学問や国境線のあいだにさまざまな横断と架橋をし、自由な学術的往来の道を築くことを学会としてのアイデンティティのひとつとしてきました。本学会に入会し、境界を越えたところにさまざまな思考の動きのダイナミズムがあることを会員の諸先輩がたや仲間の皆さんからまなび、私自身もどれほど心を躍らされたか、数えあげることができません。

水田洋会員のご著書『思想の国際転位』の冒頭におかれた小エッセイ「旅をする思想」に、自由な交流と開かれた対話を中核とするこうした本学会の知の理念が高らかに宣言されているものと私は考えています。それはたとえば、フランスの比較思想史学者ミッシェル・エスパーニュの唱えた、けっして一方から他方への影響には還元しがたい、しなやかでしたたかな「文化的転移 *transferts culturels*」の方法的理念とも通じ合うものでしょうし、何よりも本学会のHPに掲げられた絵画「ジョフラン夫人のサロンで開かれた、ヴォルテールの悲劇『中国の孤児』の読書会」が象徴するように、啓蒙の時代、18世紀を一貫して流れる多様性と開放性を尊重する時代精神の水脈でもあるのです。

新しく若手の方々に加わっていただいた常任幹事会は、小関武史会員を事務局長とする一橋大学新事務局メンバーとともに、これまで本学会が築き上げてきたこうした多様性と開放性の営みをしっかりと引き継ぎで参ります。特に、

1) 『年報』編集体制の一層の充実と丸善『啓蒙の辞典』（仮題）の刊行。会員の研究発信や大会など学会活動の記録の場であり、18世紀に関する国内外の先端的研究や学術活動の批判的紹介のメディアである『年報』編集体制をより堅固にし、同時に本学会の学際性、国際性を結集させた『啓蒙の辞典』刊行を進めていくこと、

2) 若手育成、年次大会組織の充実。大学、学術活動を取り巻く国内外の厳しい状況下において、本学会が健全な学術的発展に資するためには、将来の学术界を担う若手の支援と、若手を含めた会員の発表・交流の場である年次大会開催のより明快な組織化を構築すること、

3) 国際18世紀学会とのネットワークをより強化し、特に東アジア地域における包括的研究拠点を、韓国・中国両国の18世紀学会とともに築き上げていくこと、を目標としたいと考えています。

代表幹事の役職は重いですが、会員のみなさま方のお力をお借りしつつ、次世代に引き継ぐべく責務を全うしたいと存じます。何とぞよろしくお願い申し上げます。

古代ローマの哲人、セネカに“Vectatio, iterque, et mutata regio vigorem dant.”という言葉があります。意識すれば「住み慣れた土地を離れ、旅をし、世界を移すことこそは、われらの心の糧なり」となりますでしょうか。時代の閉塞に呑み込まれることなく、この銘句を日本18世紀学会の活動目標のひとつに据えたいと思います。



事務局より

事務局の移転について

本年6月の大会をもって事務局が移転いたしました。新しい住所等はニュース末尾に掲載しております。お問い合わせ等は新事務局までお願いいたします。

学会ウェブサイトのリニューアルについて

日本18世紀学会の公式ウェブサイトは、下記に移転しました。

<https://www.jsecs.jp/>

会員種別の導入とこれに伴う年会費の変更について

今回の中部大学での第41回大会総会（6月9日）において、会員種別の導入とこれに連動した年会費の（関連会則も含めた）変更が認められました。

通常のA会員の他に、次世代支援のため、学生または常勤職をもたない方達を対象とするB会員を設けることになりました。これに伴い従来の一律5,000円であった年会費にかえて、A会員は6,000円を、B会員は3,000円を、それぞれの年会費として毎年所定の期日までに納入して頂くこととなります。

会員種別および変更後の年会費は、年報および学会ウェブサイトの会則最新版で既に改正後のもの（会則第5条）を掲載しております。但し、実際の会員種別申告と変更後のA・B会員それぞれの会費納入は、2020年度からになりますのでご注意ください。これら運用の更なる詳細については新事務局と幹事会で確定次第、次号以降の学会ニュースおよび学会ウェブサイトで会員の皆様に適宜お知らせいたします。

なお、年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾または学会ウェブサイトの「日本18世紀学会会則」を印刷してご利用ください。

メールアドレスご登録のお願いとメーリングリストのご案内

日本18世紀学会では、会員の皆様のメールアドレス登録を進めています。それに基づくメーリングリストを介して、学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々に迅速にお知らせすることができています。

また、日本18世紀学会の全会員は同時に国際18世紀学会に所属するため、日本18世紀学会に登録されたメールアドレスは同時に国際学会にも登録されます（公開はされません）。国際学会にメールアドレスが登録されると、国際学会からの重要な連絡を直接受け取ることができます。この登録にとともに、各会員にはIDとパスワードが送られます。これを用いると、国際18世紀学会のサイト

SIEDS-DIRECTに登録される会員情報にアクセスし、それを修正することができます。数年おきの国際学会の役員選挙の際も、このIDとパスワードがあれば、郵送によってではなく、インターネットを通して投票することができます。

ただ、未だに学会員の皆様のアドレス登録状況が十全とは言えない状況で、特に国際18世紀学会事務局からは日本18世紀学会のアドレス登録状況が（日本18世紀学会の会員数に比して）かなり低い水準にあるのを憂慮する声も寄せられています。

つきましては、学会事務のさらなる効率・簡便化だけでなく、国際学会での交流促進のためにも、2018年6月の総会で会員の皆様のメールアドレス登録を改めてお願いすることに決めました（日本18世紀学会はもとより国際18世紀学会でも会員メールアドレス管理は万全を期しております）。以下のいずれかに該当する方は、学会事務局にメールでご連絡ください。（メールアドレスは学会ニュース末尾に記載されています）。

- ・ メールアドレスをまだ登録されていない方
- ・ 登録を希望されたにもかかわらずメールをお受け取りになっていない方
- ・ 以前は配信されていたメーリングリストからの連絡が最近が届いていない方
- ・ 国際18世紀学会のサイトSIEDS-DIRECTの個人ページにアクセスしたがサイトからメールアドレス未登録とされた方

お手数ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できます。詳しくは年報または学会ウェブサイト記載の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・ 学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・ 掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局までお申込み下さい。

チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りま。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、1月号は10月半ばまでに、5月

号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。)

献本

学会宛に以下の図書をいただいておりますが、手違いにより学会ニュースでのご報告とお礼が遅くなってしまいました。著者をはじめとする関係者の方々には深くお詫び申し上げるとともに、ご献呈いただきましたことに御礼申し上げます。

- ・ 森宜人、石井健編著『地域と歴史学—その担い手と実践』 (2017年12月、晃洋書房)
- ・ 有賀暢迪『力学の誕生—オイラーと「力」概念の革新』 (2018年10月、名古屋大学出版会)

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ウェブサイトからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

幹事会メンバー (50音順) : 出羽尚 (年報編集)、岩佐愛 (ウェブ/広報)、王寺賢太 (大会)、大石和欣 (大会)、隠岐さや香 (国際執行委員会派遣委員)、金沢文緒 (ウェブ/広報)、川島慶子 (ダイバーシティー)、小関武史 (事務局長、会計)、斉藤涉 (年報編集)、坂本貴志 (年報編集委員長)、武田将明 (年報編集)、玉田敦子 (国際執行委員会幹事)、鳥山祐介 (年報編集)、馬場朗 (総務)、逸見龍生 (代表幹事)

会計監査 : 井上櫻子、川村文重

事務局委員 : 飯田賢穂、伊藤綾、淵田仁

日本18世紀学会ニュース 第91号 2019年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 逸見龍生

事務局 〒186-8601 東京都国立市中2-1

一橋大学大学院法学研究科 小関武史研究室 日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs18@gmail.com

tel: 042-580-8620

<https://www.jsecs.jp/>